

青梅市文化財ニュース

第 1 7 9 号

平成14年9月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859)

風 祭 り

旧暦（陰暦）では8月の1日（朔）を『八朔』^{はっさく}といいました。八朔は立春から数えて210日めと220日めの間になり、今年は9月7日が、それにあたっています。9月は風の季節です。毎年、この時季は農家にとっては稲が^{しゅつすい}出穂、受粉、結実のいちばんだいじなときですが、大風（台風）が吹いて稲作に大きな被害を受ける季節でもあります。米は日本人にとっては食料として最もだいじなものであるのと同時に幕藩体制の時代にあつては、その基盤を支える重要な存在でした。よって、その年の米の取れ高の良否は農耕に携わる人々にとって生活の浮沈を分ける重大事でしたが、だいじな稲を大風という災害から守るための手立てはまったく無く、ただひたすら神に祈るだけでした。

このような中で始まったのが『風祭り』^{しず}という風鎮めの行事です。青梅地方では『八朔日待ち』^{はっさく ひ ま}とも呼ばれて江戸時代から行われていたようです。八朔日待ちと呼ばれたのは時季が八朔のころであり、同時に徳川家康が江戸に入国したのが天正18年（1590）の8月1日であったことから、この日が特にめでたい日とされていたからです。

青梅地方では村々で風祭りが行われていたことを伝える記録があります。長淵の中村家に伝わっている古文書（註1）には八朔として村内の神明堂やお稲荷さんにお参りして米を供え、家の中に大神宮、荒神、^{えびす}蛭子さん、さらに仏間にも燈明を^{とも}燈してお神酒を^{み き}あげ、まんじゅう、ナスの汁、煮物、干物なども供えて祈っていたことが記されています。この行事は明治の初期まで行われていたようです。

小曾木の^{こ ぶ いち}小布市では明治30年ごろまで八朔日待ちが行われていた記録があります。安政6年（1859）から明治30年（1897）にかけて書き続けられた市川家日記（註2）によると、幕末から明治にかけてコレラやハシカが流行したときなどは、特に風祭りは重要な行事だったようです。それらの病気を鎮めるためと、稲などの秋作の作物を風から守るために念仏を行い、氏神様にお神酒や餅を供えて祈ったことが書かれています。文久2年（1862）の風祭りには集落で^{かるわぎ}お金を出し合って軽業の一座を呼んで、綱渡りや^{はしご}梯子乗りなど（裏面につづく）

を見物しています。当時の様子が目に見えるような貴重な記録です。

また、同じ小曾木の富岡では、つい最近まで風祭りのお日待ちを行っていたようです。その日は庭場の人たち（註3）が集まって、まんじゅうやけんちん汁を作ってお日待ちをしていましたが、現在は途絶えました。このほかに千ヶ瀬、谷野、河辺、塩船、成木などでも風祭り、あるいは八朔日待ちが行われていたようです。それぞれ少しずつ異なっていますが疫病除けの百万遍念仏を行ったり、一升餅をついたり、隣村との境にお札を立てたり、穴をあけた大草鞋^{わらじ}を吊したりしました。この＜防ぎ＞と呼ばれる風習は、今も市内の何か所かで続けられています。さらに塩船の塩船寺では8月1日に大勢の坊さんが集まって大般若經^{だいいはんにやきょう}を大合唱する《大般若》が行われましたが、これも日を変え、規模を縮小して今でも毎年、8月の第1日曜日に行われています。この読經の大合唱の風にあたると病気にならないといわれ、小豆粥^{あずきがゆ}やオボッコという竹の筒にご飯を詰めて押し出したものなどが無病息災のお供物として集まった人たちに振る舞われました。

最近では風祭りというより、『風の盆』として越中八尾^{やつお}（富山県八尾町）が有名になっていますが、風の盆という言い方は新しいものです。国語辞典には風の盆という字句はありません。八尾の近辺では旧暦のお盆と風祭りが重なったため、いつしか風の盆と言われるようになったものと思われます。また、昭和62年に高橋治の小説『風の盆恋歌』が出版され、日本的で情緒豊かな風祭りの行事が人々の心をとらえたことから、風の盆という言葉が一躍、全国的に有名になりました。青梅市内では風祭りの行事が盆踊りとは結びつかなかったようですが、襲い来る大風に対する当時の人々の願いの深さは、今の私たちには想像もつかないほど大きかったものと思われます。

（文責 小川 秋子）

☆記述にあたり下記の文献を参照しました。

註1 青梅市史史料集第46号に記載《法鑑》

註2 同 《市川家日記》 …青梅市教育委員会刊行…

註3 青梅市史史料集第42号 庭場について 一村の小さな共同体—

…青梅市教育委員会刊行…